

浄土

十月号

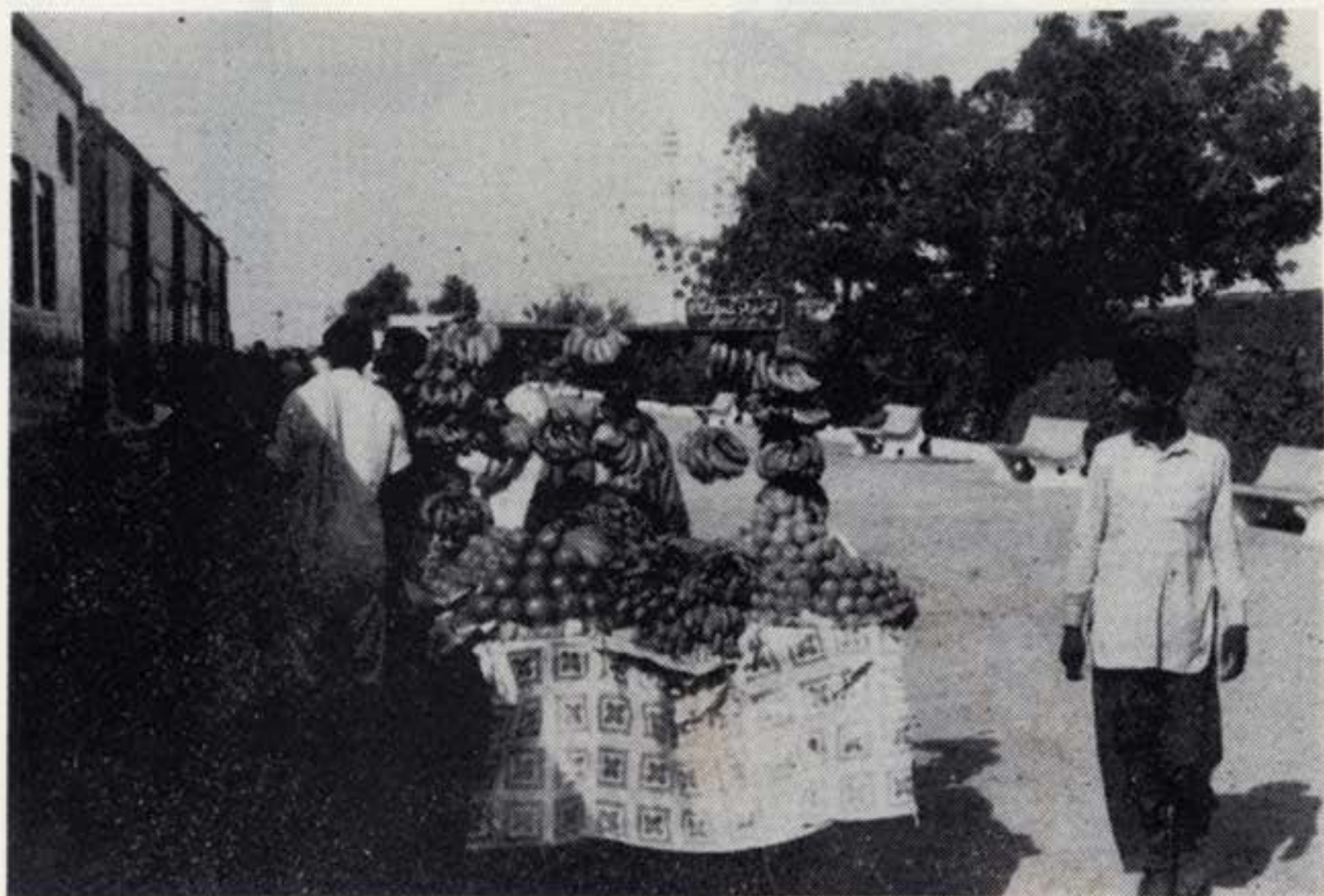


法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和四十五年九月二十五日印刷 昭和四十五年十月一日発行

第三十六卷

第十号



—パキスタンの秋—

目次

表紙「松茸」松涛達文画

十夜法話 苦修鍊行	小布施 弘 学	(2)
インドでの旅日記 =3=	佐 藤 治 子	(6)
詩歌にみる宗教心《上》	藤 吉 慈 海	(12)
大基上人と『浄土百歌仙』	須 藤 隆 仙	(17)
聖典解説(9)『往生礼讃より』日中礼讃第一偈	戸 松 啓 真	(20)
ふる里紀行(1)「北海道」武藤善友・桑原千代		(23)
和来ばなし(2) 乗りつけぬ蓮台・幽霊が命を失う 来世は出家に・嘘くらべ		(26)
新刊紹介 梶村昇著『法然』		(28)
「道」⑥ 勝尾寺への道	高 橋 良 和	(30)
宝物シリーズ⑨ 幡随意上人像		(32)



今月のことば

=高い山に登る=

高い山に登る。

ふもとから仰ぎ見た時は、到底達し得ないかと想われるが、歩一步登りつめれば、やがて頂上に達することができ。

人生もまたそのようなものだといわれる。急いでは疲れる。休んでいるとおくれてしまふ。急がず休まず、歩一步、怠ることなく歩む外はない。だがそれだけではない。障害があれば、待たねばならぬこともあるし、廻り道をする必要も起るかも知れない。けわしい急坂もあろう。飛び越えねばならない裂目にぶつかることもある。眼前に絶壁が立ちはだかるかも知れない。天候の急変で計画を放棄する場合も起ろう。やっとのことで登りつめたと思つたら、更に高い頂きが向うに姿を現わすということになるかも知れない。

この夏わたしは筑波山の隣りの加波山に登った。あえぎあえぎ沢路に登りつめて、漸く加波山神社の親宮と中宮とが並びそれぞれ修験時代の坊が社務所として対置する処に出る。一泊した白衣の講中に代って居合せた修験の先達で、御神窟めぐりという昔ながらの加波山禪定を試みた。直ぐ裏の岩窟でもあろうかと軽い気持で二つの社の間の参道を登ったが、それは峰に登り谷間に下り岩場を昇降する凡そ三時間の練行の始めであつて、踏みこめばこむ程奥深い宗教の世界の様を教えられる思ひであつた。

二日後私は上高地から乗鞍に廻った。河童橋からの壮観を楽しむ筈であつたが生憎台風之余波で雨や霧にさえぎられ待望の穂高や明神の山容も見えず乗鞍登頂もできなかった。人生も同じで、漸く辿りついた所がまた苦勞の始まりとなることもあり、快適な眺望を夢みた行程に突如風雪の難がおそうこともある。それでも人は歩を進める外はない。台風風をおそれては田の草も刈り得まい。今の一步しか行手にはない。往生を念じてひたすら今の念仏に生きる外は私にはない。

(中村康隆)

=長野市松代町長明寺=

学弘施布小

公害によって日中太陽もおがめず、夜は月もかすんで見えぬ都会生活を思うと、玆信州の清澄な土地に住んでいることを泌みじみ幸せに思う。片時も呼吸しなければ生きていけない人間にとって空気の浄不浄は死活の大問題である。

工業地帯を通過したとき、あの鼻を覆ってもなお耐えられない悪臭は、精神まで腐敗させてしまう。もしもけがれた空気にどうにも辛抱の出来ない味があつたとしたら、私達はひとときも其処に止まることは出来ないであらう。

然し、私達はこの肉体に備わった五感によって受けとれるこれ等を嫌うことは切実であつても、感覺を超えた心の世界に於ける汚臭、悪味を厭わねばならない。

末法は、善事覆いかくされて悪逆さかんに起り、物で榮えて心で滅びる時代である。今日経済成長によつて物質的には曾つてなき豊かさを呈しているが、心の成長が止まってしまっている。

また、消費文明により惜しみなく物を捨てることが平氣になつてしまった。求められる力にまかせて、まだまだ使用出来るものを破棄することは仏家第一の戒めである殺生の大罪をおかしていることである。

勿体ない、有難いの気持。物を大事にするとか、工夫するといふ心がけが薄れてきた。

物心一如であるべき人間が、物を捨てることに平氣になれば、おのづから自分の心もおろそかにする結果になってしまう。

物で榮えて心で滅びるとはまさにこのことを云うのである。

電化は急速に進んでも靈化は遅々として行われぬ。国土、経済、観光の開発には異常な関心と努力がはらわれても、心の開発がなされない。

今日よくなくなにかが不足し、狂っているといわれるのはこの点であらうと思う。今日をよくするに



行 練 修 苦

は、この否めなき事実を明白に理解し、その理解のなかから厭離の心が出てこなければならぬ。そもそも厭うべきものは何か、離脱すべきは何かが解らなければ、理想を欣求する心は起きてこない。

娑婆界をば厭ふべし

厭はば苦海を渡りなん

と恵心僧都は教えていられる。

罪と知りつつ罪をおかし、悪と知らずに悪をかさねている愚かな私達、目先で開いた花が散らずに、蕾の花の散っていくのになんの無常も感じない痴者である。

生きとし生ける万物のなかに、人間と生れた感激もなく、なにがために今日を生きるかも弁まえず、尊い人生を、そして再びとりかえせないこの生命を一寸刻みにして、死の訪れてくる足音がだんだん大きくなるのも気づかない哀れな聾者である。

この末世の衆生に救済の曙光が輝やいたのである。濁り世であればこそ、凡夫が其処にいればこそ、弥陀の出現があり、本願成就によって救われる道が開かれたのである。

法蔵菩薩の苦修錬行がなかりせば、ゆくえもわからぬ流転の旅を続けねばならなかった。然し今幸いなことに万機普益の法門に会うことが出来た。この法蔵菩薩の苦悩を偲ぶことが私の今日を生きる源泉であることをどのように領解して、弥陀に帰依していくべきであらうか。

世に苦勞人は尊敬され信頼される。それはその人が幾山河あらゆる苦しみを経験し、それを乗りこえてきたからである。一つ一つの苦勞を悉く自分のなかに吸収してきた実にたくましい人なのである。

人生に於けるさまざまな苦を逃避しようともかくのではなく、反撥するのでもなく、また忍んで抜けようとしたものでもない。それと真正面より四ツに組んで、自分の成長に取り込んでしまった人な



のである。

あらゆる苦しみや、悲しみがその人をつくり上げて、多くの人々からたよられ慕われる魅力をただよわせている人……それが苦勞人なのである。

従って行きづまったとき、困った場合にその人に訴えて助けを求めるならば、おのづと道が開けるのである。それはその人の尊い過去の経験がものをいうのである。

すべての悩みごとの相談にのれる人は、あらゆることに身を以って味わってこななければならない。幼ない子を亡くして悲嘆のどん底に泣く母を慰め得るものは、他人の悔み言葉より、一卷の書物よりも、曾つて子を亡くして泣いたことのある人の涙こそ唯一の救いである。

経験してきたということ位、人を動かすに強いものはない。それは理論でなくその人の身についた力であるからである。

其昔、法蔵菩薩は、いつの世の、いかなる人をも幸せにしてやろうと思惟し、人間が日々夜々遭遇するあらゆる苦しみを、おのれ自身に体験しようとして幾年月の修行をされたのである。この世は苦悩の満てるところであるがため、人間の味わう苦しみもまた果てしなく数知れない。それをおのが身に経験して、いかなる人の助けにも応ずることの出来るようになるには容易なことではない。到底人智では計りしることの出来ない年月（兆載永劫）が必要であった。

弥陀の本願に於ける「設我得仏……不取正覺」の前後四十八回にわたる決意の吐露、「一々誓願為衆生」のきわまりなき慈愛、「そして假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔」と悲願を達成せんがため、いかにおのが身を責めに責めぬかれたことであらうか。

これを思うとき唯々感激の涙を止めることを知らない。そして私は今現に弥陀の思われ者であったとの法悦にまたも流れる涙をおさえることが出来ない。



「汝わが名を称えよ、然らば救わん」のよび声は、苦をかさねてこられた弥陀の大いなる自信の叫びであり、悩める私達への愛のささやきでもある。

私達が苦しみから解脱する道はむづかしいものではなかった。私のために苦勞をして下さった弥陀のみ名をよぶだけで、この苦しみから救われるとはなんと尊いことであり嬉しいことではあるまいか。苦勞人にたよって進むべき道が開けたように、弥陀にたよることによってあらゆる苦しみ、悲しみ、怖れが解決されていくのである。

「一々誓願為衆生」「念仏衆生攝取不捨」の衆生は、大衆とか多くの人々と解すべきではない。「衆生とは私である」と受けとることが信仰である。

世の苦勞人はおのれが生きていくために抜けて来た苦勞であろうが、法藏菩薩が苦勞されたことはおのれの成仏が先でなく、この悩める和を救うことが目的であったとき、心の奥底より念仏をさけはずにはおれない。「われ常に汝と共にあり」（常照我）との深き慈愛を頂いたとき、日々苦しみに会うたびごとに、これも弥陀の経たもうところであったと思うと、苦しみは薄れ、反って慈悲のやるせなさに喜ぶことさえ出来るのである。

苦しみも はた悲しみも み仏の 胸にだかれて おると思へば

自分だけ苦しんでいると思うから、おのれが辛く、他を恨み腹立たしくもなるであろう、然しそれは母親の胸にだかれてなお泣くが如きものである。

私と共に苦しんでいて下さるお方（弥陀）が私の心の中に宿っていらっしゃると気付いたとき、仏の救済を確信することが出来る。

苦しみや悲しみに会うことは、み仏を常に身近に感ずるときである。

不離仏である弥陀につきまといわれて生きていける私達は幸せ者である。

二月十六日、目がさめると未だ二時半。寝坊しては大変と緊張感でこんなに早くに、はつきりと目がさめてしまった。そっとかやを上げ起きて出発の用意をゆっくりする。固形燃料に火をつけ、お湯を沸かしお茶をのむ。実においしい。暫くするとベアラがノックしてお茶をもって来てくれた。お茶といっても日本茶ではない。「チャイ」と呼んでいるけれ



＜霊鷲山上の一行＞

インドの旅日記

= 第三回 =

佐藤 治子

ど紅茶である。それにしても、もうこの人達は起きていたのかしら。出発の時間が近づく。他のグループの人達の部屋の前をそっと通る。大きなイビキがきこえてくる。玄関の灯だけがたよりの真暗な所に三台の自動車が出発を待っている。水筒にお湯を入れてもらったりした人達も揃い、野呂さん達の見送りの中に、いよいよ出発。四時半。



＜竹林精舎の一部後方は僧院跡＞

車に乗ったものの荷物が減ったせいか、忘れ物をした感じ。東京出発以来、始皇帽子と松子を入れた桐の細長い箱を若い方達三人で替る／＼ガヤまで持って来て下さった。あの箱は中のものそのまま、これから参詣に見える宗門の方々のお役に立てばと、記念に寄附させて頂いたのだった。巖谷理事長さんも未だ整っていないから大役立しますと、大変喜んで受けとって下さった。かさばっていたその荷物がへったのだった。それにしても若い三人の方々が持ちましよう、快くぶらさげてここまで責任をもち運んで下さって、私達二人は申訳けないの連発で、感謝のし続いでガヤまで来たのであった。

靈鷲山へ

さて真暗な径を車は走り始める。暫く行くと低い家が並んでいる町へ入る。ガヤの町。未だ部落が深いねむりからさめていない。そこを過ぎると、大樹の並木がヘッドライトに照らされては現われ消えて行く。たまに白い布を頭からかぶっている人が現われ、暗闇に消えて行く。巡礼だろうか？ ライトに照らされ、牛が現われた。牛を引いたり、牛に引かせている車にのっている農夫達はこんなに早くどの辺から来

て、どこへ行くのであろう。

走り続けている内に、少しモヤッて来たなと感ずくと、一本二本、うっすらともやの中に立木が見え出した。夜が明けはじめて来た。まるで墨絵のよう。あの山かな。こちらの山の向うかな。けれど、その山のふもとを縫うように走り、また別の山が近づいて来る。日の出に間に合うかしら。もうすっかり明けた畠径を急げ／＼とひた走り。やがて径もせまり、岩山に入る。そしてロープウェイが見えて来た。車はその下の建物の所でとまる。皆早く登らなくては、足早に登り出す。(ロープウェイは近くの別の山頂へ行くためのものであった)。私もはじめは勢いよく登り出したが、ぜい／＼いい出した。これはいけない、喘息みたいだ。しかたがないと歩をゆるめた。目の前につき出た崖の上から、しっかりと誰か声をかけてくれる人がいる。グループの人達も岩かげに、あるいは木の影にと曲りくねった山道に見えなくなってしまう。

岩山の急坂をやっこらさとたどりついた時、朝日が丁度昇ったところ。ふもとの村へ泊られたという妙心寺派の一行が御来仰を拝し、読経をしていられた。そこへ私達のグループが合流し、一番おくれた私も辛うじて紫の雲の中より昇る日

の出を拜すことができたのである。妙心寺派の一行がにぎやかに下山された後、私達はしーんとした山上で、ここでお釈迦さまが座禪されていたのだな、ここでビンビサラ王がお釈迦さまを拜み、お説教をきかれた場所なのだと、暫く感激の面もちで時を過した。ふりかえると、なるほど驚に似た巨大な岩がある。霊鷲山の名はここから呼ばれるようになったのであろう。突然四囲の山にこだまして、ヤッホーに似た声がきこえて来た。一人二人チベットからの移住民だろうか、登って来た。言葉は通じない、けれどほほえみをもった親しげな村の人達である。一緒に写真をとる。再びもとの径を降りはじめた。微風が心地よい。仏法僧が鳴いている。何と清々しい霊地参拝であつたらう！

王舎城から竹林精舎へ

昔は栄えた都も、今は山間の平地に細いデコボコ道が続いているだけ。その道を車でゆっくり走る。大医ギバがお釈迦さまにさし上げたという棕樹の園もこの辺りであらうか。暫くして車をとめ、広々とした何の建物もない、けれど由緒ある所であらうが、案内される。

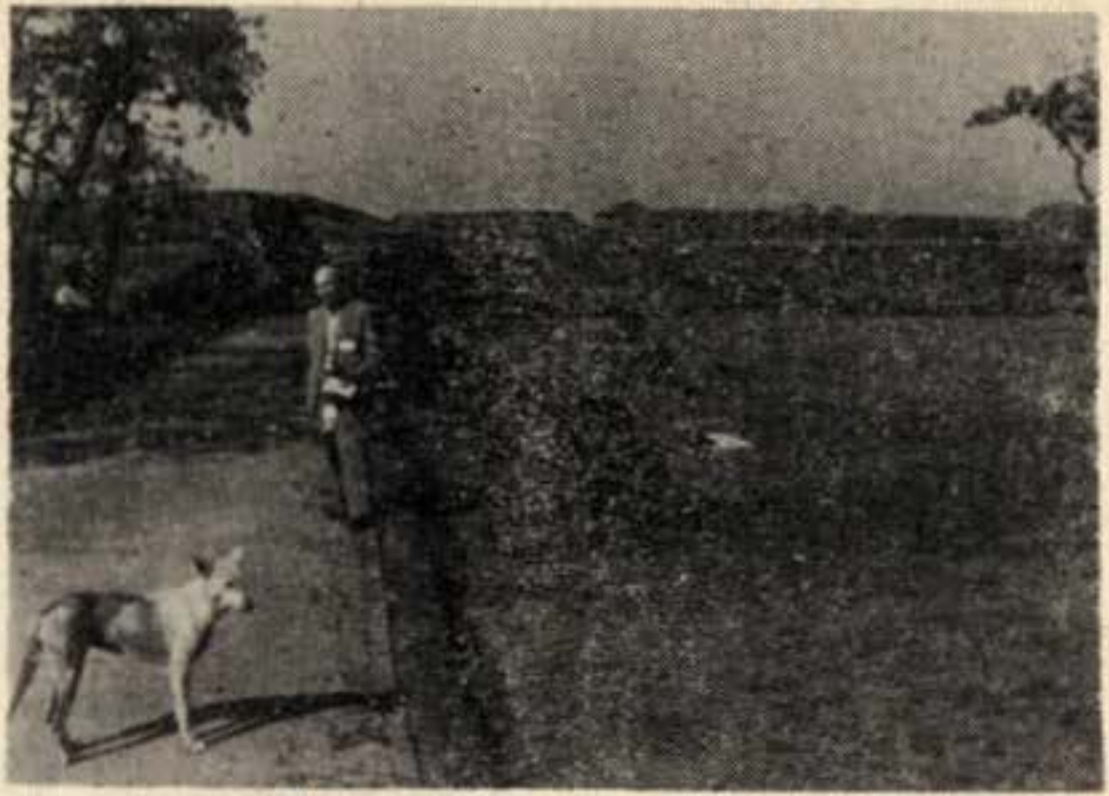
このあたりがビンビサラ王が息子のアジャセ王に幽閉され

た牢屋のあたりであるという。「王舎城の悲劇」はこのあたりで起つたのであつた。観無量寿経云々と話しをする声もきこえて来る。私は感慨無量で眺めているお坊さんを、後から一枚写真におさめた。再び車にのり、ラージギルのホテル風の宿へつき、朝食を頂く。

九時に出発。すぐ近くの竹林精舎跡を見学。広大な竹林園と呼ばれた遺跡は竹の大きな株が、あちこちに伸びほうだいになっている。ふと案内のシンさんは私達を一株の竹の近くへ連れて行って「これをごらんなさい」と指さした。その竹だけ色あざやかな黄と青の縞がたてに入っている。珍らしいものである。日本の極寒の二月に、この谷間の竹林園にはダリヤや色々の草花が色あざやかに咲きみだれている。ひと廻りして外に出ると、街道沿いにバザール（市場のようなもの）に部落民がたかっている。そのそばを一群の牛がのそ／＼と通って行く。

ナーランダ大学

ナーランダ大学ビンビサラ王道と名づけられている田舎道を車は走る。大学の門の前で車をおりる。暑い日ざしの中で道ばたに、やせほそった老人のこじきが四五人すわってい



る。細い／＼腕をさしのばしている。玄奘三蔵もここへ勉強に來られたという仏教大学の遺跡は、仏教の衰退と回教徒の侵入とで破壊されたとはいえ、當時を容易に偲ぶことができる位、大規模な建築であつたらしく、教室あり、食堂あり、井戸あり、説明を聞きつつ青空が天井となつてゐる、昔榮えし大学の残つてゐるレンガ造りの土台をあちらへ、こちらへと歩き廻る。

日蔭へ入ると、ほてった肌に冷やかな空氣が心地よい。學問の一大拠点でありしこの大学の跡は「夏草やつわ者共の夢の跡」ではなく、実に手入れがよい。國家管理で遺跡保存をされているという。大学の構内の向うに、レンガ造りの大き

な塔のようなものが見える。ストウーバ、塔である。破壊を危かれた仏像がたくさん残つていた。

金魚草の咲きみだれる徑を門へと戻る。近くに博物館があり、見學に行く途中、パンフレットが土産物屋にあると案内人がみせてくれた。英文なので買うことにした。けれどなとうすぎたない本だろう。何年も風にふかれたように色もあせてしまつてゐる。でも二三部買うことにした。本そのものより、胸ふくらむ思ひの満足感は、このうすぎたない本ですら得がたきものと考えてしまふ位、考古學的ムードになつてしまつてゐたのだ。ナールンダで求めた古書！ 京都の河原町の古本屋で買う本とはちがうなど、青空のもとに展がる遺跡をこの目で見、この足で歩いたという感激で一杯であつた。

トゥーリストバンガロウと名づける、あの朝食を済ませた宿屋へ戻りおひるを頂く。まあ蠅の多いこと！ 一寸おなかに少し物を入れた程度に食べ持参のお茶をのむ。水筒にそれぞれお湯を補給してもらい一時半出發してパトナへ向う。

パトナへ

パトナへ延々と続く徑の左右は水田。つるべ井戸が見え

る。レンガの工場もある。工場といっても露天である。男子にまじりサリーを着た女の工員が、レンガを頭にのせて腰で調子をとり運んでいる。のんびりとした風景である。

大きな樹木の茂るあたりに小部落があった。車がとまる。シンさんがお茶をのみますかと、私達の車へ近よって来た。運転手達は一休みしたいのだろう。チャイ（お茶）のお釜のお湯のけむりが見える。日本の峠茶屋だったら飛びおりても一休み、のどをうるおしたい。けれどお茶は熱くても、のむお茶碗などのことを考えると、のまない方がよさそうだ。誰も希望者がなさそう。「では行きましょう」の一声で車は走り出す。運転手達だけでものませればよいのに、おこりもしない運転手に同情してしまふ。

鉄道の踏切りでストップ。ふと見ると、道ばたにしゃごんでサリーの女の人小さいつぽに泥をぬってほこすっている。うすよごれているサリーに、髪のもも乱れているこの人は、車から見えている私達なんか気にもとめないで、念入れにみがいっている。金色のつぽはああして光らせるのだそうだ。聖なる水を入れるつぽ！ ガタンと車は動き出した。汽車はもう通ってしまったらしい。

パトナ市へ入り、パレスホテルへついた。

修理中なのだろうか、ポーターもいない。運転手も手伝ってくれて、自分達で荷物を玄関内へもちこんだ。二階にフロントがあるらしい。いたってなまけもののホテルだ。ところが案内された部屋は立派である。

パトナは古い都市。愛育王が初めて全印度を統一し、ここパトナを都と定められたのである。お釈迦さまの遺跡にはアショカピラーが必ずといってよい位造られているが、仏教を信じ、仏教を世界的にした王様の都、僧院もあるという。博物館へ行った先生達は、その日は休館で失望してホテルへ帰って来られたし、この都市を一泊のため寄っただけという結果に「も一度ここへ来て、ゆっくり見学したい」と残念がっておられた。

さて、ホテルは新らしい形式をととのえる改築中なのであろうか。また妙心寺派の方々と出合う。小さな部屋で一緒に夕食。ホテルへ入ったら夕食はネクタイをつけてと御達しがあつたらしい。修理中で食堂でもない部屋で夕食をさせるホテルで、服装の注意を申し渡したエージェントの知ったかぶりに、いささか憤慨せざるを得なかった。部屋へ何人も顔を出してくれるボーイには、いささか閉口。一寸何とかしてくれなくては、チップを渡さざるを得ないお客の私も、ニコニ

コしていてはきりが無い。長椅子にチョコンと座りこみ、天井にとりつけてある扇風機の風にふかれながら原稿（日本に帰る妙心寺派の一行についているエージェントの人に持って帰ってもらうもの）をまとめなくてはならないと、気ばかりせく。頭はまとまらない。どこへも出ずに日本茶をのみながら、集中させようと頭の中を整理するのに骨をおってしまった。

十七日、早く起きた私は、カーテンをしばらく戸を開けて、外を見おろした。朝の町の風景をみたかった。男の人達が齒をみがいている。屋台店ではチャイの湯けむりが立っている。写真をとりたい。でも逆光線なのであきらめる。

七時半朝食。八時十五分ホテルを出て空港へ。仲々立派な町だ。どう廻って来れたのだろうか、浄土宗の別のグループにお会いした。「ヤアヤア」と十五日に御法要でご一緒だったのに、なつかしげに近よって来られる方もいる。「ちょいとバスが牛をひっかけそうになって、どえらい目に会いましたよ」と、興奮未ださめやらずの方もいる。牛が一寸触れなかったただけなのに、どこからか人が集って来て、手に手に棒やレンガをもって、今にもたたかれそうになったそうである。インド人の運転手は頭をかかえ小なくなってしまい、困

った日本人の乗客の中から、何か品物をお詫びにとさし出して、ようやくかんべんしてもらった由。あとで聞くところによると、この方達の飛行機のプロペラに、はげたかがまきこまれてしまった珍らしい事故にも会われたという。インドへ来る前に、一寸事故を起すとどこからともなく人が集まって来て、薄気味わるいと聞いていたけれど、牛を大切にするインドで、牛をひきそうになったとたんに、棒やレンガを持って血相をかえてかたまつて押し寄せられては、どんなに恐ろしかったであろう。幸い通りすがった日本の商社の人らしい人が、一行に空港までつき添い送って下さった由。名前をきいても、旅先ではお互い助け合うべきですと、名前も告げず立去られたそうである。

早く出るはずの飛行機は仲々来ない。しかたなくベンチにこしかけて、入れ替り立ち替り入って来るインドの人達をみては、一人で位定めをしたりしていた。

日本へ帰られる妙心寺派一行の飛行機を見送り、カトマンズへ向われる浄土宗の方達を見送り、三時間もおくれた私達の飛行機は十二時過ぎ出発。カルカッタ上空が濃霧のため、こんなにおくれてしまったそうである。いよいよあの母なる河といわれる、ガンジス河に近いベナレスへ行くのだ。



詩歌にみる宗教心へ上

大正大学女子実践仏教講話より

藤 吉 慈 海

(京都・花園大学教授)

宗教をご理解いただくためには、いろいろな方法がありますが、今はお歌や詩を通して見たいと思います。

浄土宗歌として有名な法然上人の

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

というお歌があります。この中にあります「月影」ということば、これが宗教の世界そのままをあらわすことばであるということ、これを旧制の高校時代に教わりました。確かに宗教の世界を展開するにふさわしいことばだと思っています。

三木露風の歌に、

古里の小野の木立に笛の音のうるむ月夜や乙女子は、あ

つき心にそをば聞き涙ながしぬ、十年経ぬ同じ心に君なくや母となりても

というのがあります。この歌はすでに母となった人を偲び、子供の頃の思い出をこのままに歌ったものであります。この歌のうわべだけの意ではそれほど感銘をうけません。けれども、一步深くほりさげるならば、月夜二人で木立にたずんでいると、誰ふくともわからない笛の音が聞えてきたことによって自ずと涙流れるのを覚えた、という未だ恋愛感情を持たぬ純粋な子供心をみることができます。こういう天子のような、聖なる童子の姿を見るような心というものは、人間が生来持ち合わせている清い心です。

こうした心持ちと、先程の「月影」のことば、つまり天上の月は地上とは違った世界である、そうしたものに眼をさますこと、こうしたことから開ける心が宗教の世界に入っていく第一歩であると思います。そして人間はだれでもこうした心持ちをち合わせているのです。

皆様方もこの暑いところ、この知恩院でこうした会を持ったということは、こうした何かを得たい、それが何んであるか分らないがただ手を合せ、念仏を申すことによって得たいということではないかと思えます。先程の「涙をながした」少女と同じように、何か分らないけれども永遠なるものを求める人間の究極的な要求によるものであると、いいでしょう。

したがって三木露風の歌も、この中には宗教の世界までふれているとは思わないが、人間にはそうした子供の頃の出や何かを得たいという関心を持っていることは事実です。それが一歩社会へ出れば、所謂日常性の中に埋没してしまい、究極的な関心は忘れてしまう、人は死ぬものであるということさえ忘れてしまうのが現実です。

法然上人の先程の宗歌とされております歌は、「光明遍照十方世界 念仏衆生 攝取不捨」といわれる世界を歌われた

ものです。即ち月の光は何ら区別なくそそいでいるが、その気持ある人にしか分るものではないということです。この気持とははかることのできない寿命と光、時間と空間にひろまっている無限の仏であるアミダ仏に帰依し、ナムアミダ仏とお称えすることです。つまり私たちの常識でははかることのできない、永遠なるものに私たちは帰依する。そのことをことばに出して表現している訳です。永遠なるものを求めている人間が、その求める気持をことばに表現するならば、ナムアミダ仏としかいえない、という求道心のあらわれであります。

これが「溺れるものは藁をもつかむ」のような神頼みとなつてはいけません、最初はこうした心持から入っても、だんだん深く本来の姿に至ることになります。そして最後にはアミダ様と自分が一つになる気持にまでなります。

宗教はこうした段階性あるものでもあります。月を見て初めはきれいだなあと思う心から、それが永遠なる美しさにかわり、それにあこがれ、それが何んであるかを知りたくなる。そしてそのものにふれることを願うようになるのです。

しかし、現実には家がほしい、車がほしいなどと目先のことにのみ気をとられがちなものです。こうした時にこそ、永

遠なるものに関心がなければ、人生は非常に味気のないものとなり、精神的な豊かさに欠けましょう。

長崎にありますキリスト教系の長崎家政短大の秦美穂氏の歌に、

たかむらにいざよひしは　しばしのみ

すでに月しろは白くふけつつ

というのがあります。これは竹やぶに出かくれていた月がしばらく見ぬ間に、いつかのぼりその光がふりそそいでいるというだけの歌です。しかし、宗教的世界、永遠なるものの世界に入る前にしばらく「いざよひしている」が、いつのまにか「月しろは白くふけて」求めていた道に近づき深まっていくという意味も含まれていることを教えられます。

次に高名な哲学者である西田幾多郎先生がその弟子久松真一先生の書かれた墨絵に

万屋人間夢

天辺孤月明

という字を書かれています。人間の世界には、悩み、煩悩など心の葛藤によって寝つかれない夜もあり、様々の夢もみているであろうが、しかし天上には永遠の月のみが明らかである、という歌です。

こうした「月影のいたらぬ里はなけれども」といわれる。永遠唯一のものをよく味わい得る世界がなければならぬ。人は月が照っていることを知らず夢をみているけれども、実は月は一晩中照っている。人間はこうした永遠なるものがあるにもかかわらず、気づかずに生活しているということを強調されていると思います。

西田先生は、また「寸心日記」の中で、

嘆き給ひそはかなきは、この世界の恋の性なれば怨み給ひそ別るるは、相見し者の常なれば、仰ぎ給ひな夕月は、今宵もいかにさやかなる

と歌っています。これも人間の世界における宗教というものをあらわしています。恋愛感情ははかなき一時的なものであるから嘆いてはならない、会ったものは確らず別れねばならない（愛別離苦）から怨んではならないと、人間の世界の姿をあらわしています。理屈では確かにそうであるが、実際には人間の感情は低迷した煩惱の世界で、うらみ・なげきというものがあります。こうして下を見ている時はそうであるが、天空にある夕月は今宵もあんなに照っているではないか、というのです。

ここに一大展開があります。これが、回心えしんといわれるところ

ろです。この煩惱の世界に低迷しては人は救われません。そこから「夕月を仰ぎ給う」ようにその部分からぬけきり、そして宗教の世界に入る。この回心の氣持が人間一生の間に、宗教の世界を求めていれば確らずあるのです。

さて、与謝野鉄幹と晶子の生涯についてはいまさら言うまでもありませんが、久松真一先生と御一緒に欧米を巡った時、はからずも当時スペイン駐在大使をしていられた御令息

秀氏にお目にかかり、一夜御馳走になりながら、御両親のとなど直接うかがったことがありました。大使はすこしはにかみながら「世間ではいろいろなことが父や母について言われています」とこぼしていられた。しかし御両親に対して大変な尊敬の念をもっていられるように私には感ぜられました。

鉄幹と晶子がどのようにして結ばれたかについては、いろ



＜知恩院で＞



＜比叡山中で＞



＜難行のあとの一服＞

いろ形で伝えられていますが、晶子門下の岩野喜久代女史が『在家仏教』誌上に発表された晶子の詩を紹介します。それは「恋」と題する短い詩です。

わが恋を人間ひたまふ　わが恋をいかに答へん

譬ふれば小さき塔なり　いしずえに二人の命

真柱に愛を立てつつ　層ごとに学と芸術

汗と血を塗りて固めぬ　塔はこれ無極の塔

更に積み更に重ねて　世の風と雨に当らん

なほ低いま立つ所　なほ狭しいま見る所

天つ日も多くは射さず　寒きこと二月のごとし

頼めるはかすかなれども　ただ一つ内なる光

これは厳しい詩です。二つの生命が一つになって生きるということがすでに大したことです。晶子はこれを小さな塔にたとえています。その塔の真柱に愛を立て、層ごとに学と芸術、汗と血を塗りて固めぬといっています。全くものすごい程の力です。この厳しさがあったればこそ、当時はおろか今日の人をして、なお感銘せしむる作品となっているのです。塔はこれ無極の塔、更に積み更に重ねて、世の風と雨に当らん、このような勇氣も非凡な二人の生命の燃焼するところ、自らわき出でたことでありましょう。晶子はなほ低い

ま立つ所、なほ狭しいま見る所、と自己を反省し、どこまでも無極の塔を築かんとしています。しかし御存じのように彼等二人の生命も、燃えてばかりはいなかった。天つ日も多くは射さず、寒きこと二月のごとしとその冷さをかこつています。しかし二人とも非凡な人だけに、決してくずれてはいません。頼めるはかすかなれども、ただ一つ内なる光とうたっています。

この内なる光をもつ人、この内なる光を自覚しうる人は偉です。この詩は恋と題されていますが、これを今こころみに信とおきかえたらどうでしょう。わが信を人間いたもう。わが信をいかに答えんと自問自答してみると、この信こそは内なる光といえましょう。この信が学と芸術とをおしすすめる推進力となります。仏教ではこれを信根といっております。信という根が地下にないと草木も育ちません。仏教の信は目には見えないが、地下三尺の下にあって、草木を生育せしめる根のよように、学と芸術の花を咲かせる原動力であります。信が信根といわれるゆえんです。この目に見えない内なる信があるかないかによって、人間は大変違うものです。人間の信は内なる光であり、心の奥底にある深い心であります。

大基上人と

『浄土百歌仙』



「浄土百歌仙」

須藤隆仙

＝北海道・教学研究会＝

私の手許に『浄土百歌仙』という和綴本がある。安政三年（一八五六）に印行されたもので、その奥跋に次のようにある。（原漢文）

「大なるかな和歌の徳なる天地を動し鬼神を感ぜしめ、人倫を化す。ここにいま二十一代和歌集釈教の中、我が浄土法に関係するもの百首を抄出して歌人の肖像を模写し、勒（刻）して一卷となし、名づけて浄土百歌仙という。以て童蒙の玩弄に備え、偏く視聴の備をして勝縁を無量寿の浄域に結ばしむ。ああ仏種は縁より起る。それ誰かこれを是ならずといわん。」

時に安政三年次丙辰仲春、尾陽隠衲某跋

つまりこの集は、二十一代和歌集中より浄土念仏に関する信仰歌一百を選んで「浄土百歌仙」と名づけたもの、希有の念仏歌集ともいうべきものである。

二十一代和歌集とは世に「勅撰二十一代集」といわれるもの、天皇や上皇などの宣により、撰者（編集者）が選んだ歌集二十一を総称したものである。そもそもこの勅撰の風は、中国において皇帝の命により編集された詩文集を範としたもの、それまでは漢詩文におされて低くみられていた和歌が、社会的に認められて産出したものといえる。その二十一と

は、古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新勅撰、続後撰、続古今、続拾遺、新後撰、玉葉、続千載、続後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新続古今など、醍醐天皇の延喜五年（九〇五）より後花園天皇の永享十一年（一四三九）までの、藤原初期より室町中葉にわたる諸種勅撰歌の総集、撰者もまた紀貫之をはじめ、そうそうたる文人ばかりである。

さてところで、この二十一代集より浄土念仏の信仰歌を選び出して「浄土百歌仙」を上梓した「尾陽隱衲某」とはいつたい誰かというに、幸いこの板本の末に「聖衆来迎菴版」とあったので、私は直ちに幕末の学僧・大基上人とにらんだ。聖衆来迎庵とは正しく大基上人の庵室だったからである。また上人はなかなかの文人、この人の所業としても相応しいものであった。

私が大基上人の名を知ったのは、北海道の仏教小史を調査中、有名なエゾ官寺・善光寺の縁起を著したのが当時この幹事職たりし大基上人であったがためで、いらいこの上人を敬仰すること折にふれては想起していた。

上人の伝は浄土宗全書巻十八に収めたる『略伝集』の中にあり、その要点を転記すれば次の通りである。

上人、常蓮社立誓行阿如法と号し、金剛志の別号あり。天明五年正月二十三日肥前島原北有馬村に吉村伝六の次男として生まれた。資性孝順、すこぶる記憶に富み、寛政八年十二歳で筑後久留米の心光寺に入寺して名を大基と改め仏道の人となった。十八歳の秋、江戸小石川伝通院の学頭・智門師の寮に入り次いで鷺洲師の寮に転じた。二十歳五重並びに宗戒を受け、文化三年（一八〇六）鷺洲師エゾ地善光寺の住職を幕府より拝命するや、それに随従して同寺に入り（二十二歳）幹事職たること四年、この間前記のよう「善光寺縁起」などを著している。文化六年京に上り天台・唯識・華嚴などを改めて学んだ。ちょうどこの頃將軍文恭は日蓮宗を信じて浄土の法は振わなかったため、増上寺典海大僧正これを憂い、鷺洲上人にその善策を質した。上人の答えは徳本行者を江戸に招じるより外なしのことと、行者の所在地摂州住吉山にこれを請う役目を大基上人に命じた。大基上人直行して行者を招じきたり、上人はそのまま江戸で行者に随従する身となった。文化十五年徳本行者示寂ののちは尾州公の括に依じて建中寺の住職となった。弘化三年六十二歳を以って同住職を辞し、車道に清庵を建てて隠居し、その庵を聖衆来迎庵と名づけたので

ある。以後十萬日の別時會を修したり、有縁の寺に金子・經典を寄贈するなど善根の範をたれ、熱田雲心寺に丈六の弥陀尊像を建立するなどして明治三年二月二十五日臨終行儀中に大往生したときに八十六歳。神谷大周師はその弟子である。著書に「当麻曼陀羅講義七卷」「尾陽往生伝」「勧誘同法記」ほか多くあり、伝通記の校訂などもしている。そしてその宗学の系譜こそじつに賢洲—鸞洲—大基—大周と次がれ、石井教道先生の学風となったのだともいわれる。

以上のような次第で、大基上人は浄土の宗義を守った幕末殊勝の学僧であるが、この上人によって「浄土百歌仙」なる一書が刊行されていたことは、また僥倖なことであつた。

「歌仙」とは「歌に秀でた人」の意、六歌仙だの三十六歌仙だの語はつとに知られるところである。またこれら歌仙の肖像を描いた「歌仙絵」と称されるものは、和歌に書添えられて鎌倉時代頃盛んに流行したもの、いまこの「浄土百歌仙」も一々にその肖像を付したものであるから、歌仙絵としても貴重のものである。この度小生考うるところあつて、この「浄土百歌仙」を開宗八百年御待受記念出版として複印して有志に頒布する計画を立て、準備中でありますので、ご希

望の方は「函館市船見町18-14、教学研究会」あて申込まれたい。左にその内容の数首を転記すれば次の通りである。

○聖徳太子

いそげ人弥陀のみ船の通う世に乗りおくれなばいつか渡らん（玉葉）

○西行法師

西へ行く月をやよそに思うらん心にいらぬ人のためには（続千載）

○田口重如

たゆみなく心をかくる弥陀ほとけ人やりならぬ誓ひたがふな（金葉）

○源俊頼朝臣

阿弥陀仏と唱ふる声を梶にして苦しき海をこぎはなるらん（金葉）

○前大納言為氏

ひとたびもその名を聞きて頼むこそうへなき道のしるべなりけれ（新千載）

○仁明天皇

いつの間にいとふ心をかづ見つつ蓮はちすに拝むわが身なるらん（新拾遺）

戸松啓真

(大正大学教授)

沙門善導『往生礼讃』より
集記

日中礼讃第一偈

彼の弥陀の極楽界を觀するに

廣大寛平にして衆宝をもつて成ず

四十八願より莊嚴起る

もろもろの仏刹に超えてもつとも精たり

本国他方の大海衆は

劫を窮めて算数すれども名を知らじ

あまねく勧む西に歸し彼の会に同ぜよ

恒沙の三昧 自然に成ぜん

善導大師は実践法として時間的な上から『往生礼讃』を六時に構成したが、偈文の趣旨からすると次の三つにわけられる。第一は人間と人間の生死無常に関するものである。第二はわれわれが意識するとせざるとに關係なく犯してしまふ罪、それはわれわれ人間のはかり知れない苦しみのもとになる罪を懺悔せしめる偈文。第三は礼讃の対称となる極樂浄土の依正二報、すなわち浄土やその教主である阿弥陀仏や聖衆についてのべた偈文である。解説の第一回で人間の無常性についての偈文をあげ、第二回ではその無常な人間がいかなる願いを持つべきかをのべている発願文をとりあげたので、この回ではこの世に生れて成長しやがて年をとり最後病氣になつてこの世を去って行く人間が、有限な有為の世界ではなくて、永遠な不死の理想世界として求めた極樂浄土やその世界の聖衆についてのべた偈文の中から一偈をえらぶこととした。それがこの第六日中礼讃の一番はじめにでてくる偈文である。

日中礼讃は善導大師が觀經の十六觀によつて二十偈（偈文をとえながら礼拝するから二十拜ともいう）を創作したものである。觀經は極樂浄土や極樂の莊嚴を觀察して往生する法がのべられているのであるから、当然日中礼讃は浄土の莊

蔽に関する讚歎の偈文が多いのである。その中でここにあげた第一偈は総讚といって、浄土についての総論または序説のようなもので、浄土はどのようなところであるか。そしてどのようなにして建立されたかについて簡潔にのべられているのである。

偈文について

この偈文は三つに分けることができる。すなわち、はじめの四行は極楽世界の莊嚴（依報）についてのべたものである。

觀とは觀經によって浄土の相をみることである。廣大とは大空のように広く大きく辺際がないことで、寛平とは大經にのべられているようにけわしい山もなく海も谷もなくたいらであること。極楽世界は何からできているかというところ、衆宝すなわち多くの宝からできているという。大經によれば自然の七宝すなわち金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、砗磲、瑪瑙等が合成して地となつていゝるという。阿彌陀經では金、銀、瑠璃、玻璃、砗磲、赤珠、瑪瑙の七宝をあげているが、極楽の大地や建物などの莊嚴がこれらの七宝をもつて表現されているというところは、經典成立当時のインドにおいては、最高価

値の世界であつて、浄土を娑婆世界の語をもつて表現するとすれば、これ以外には表現することができない世界ということであろう。それでは極楽浄土はいかにして生じたのであるか。これは浄土教の重要なしかも根本的な問題である。善導大師はこの偈文において極楽浄土は仏の願心によつて建立されたものであるとのべている。阿彌陀仏の前身である法蔵菩薩が煩惱多く生死に迷えるこの世の人びとを救わんと四十八の誓願をたてて、長い苦しい修行をしてその誓いを成就した時に、極楽浄土が建立されたのである。そして法蔵菩薩は無量の寿命と無量の光明を得られて阿彌陀仏となり人類の救済者となつたのである。それは無量壽經に説かれた通りである。しかもその西方浄土は十方に無数の仏国土があるが、それらを超越してもっともすぐれた土なのである。

次の二行は極楽浄土の聖衆についてのべたものである。本國とは極楽浄土を指し、他方とは西方極楽浄土以外の十方浄土をいうのである。極楽浄土の聖衆や極楽浄土へ来た十方浄土の聖衆が何年たつても数えきれないほど沢山いるので、ちやうど大海水のようなものであるから大海衆といったのである。

終りの二行はすべての人びとに西方浄土に帰することすめていゝる。彼の會とは極楽浄土における仏の説法の會座を

いう。恒沙の三昧とは無量寿經の下卷に説かれているように極樂に生れた者は、空三昧、無相三昧、無願三昧等かぎりない三昧を修してそれが自然に成就されて悟りの境地に入ることとをいうのである。

善導大師の極樂淨土

善導大師は極樂淨土觀について二つの説き方をされている。一つはこの偈文にのべられているように、具体的なかたちをもった淨土であって無量寿經や阿彌陀經に説かれているもので指方立相しほうりつさうの淨土である。しかもそれは阿彌陀仏が衆生を救わんがためにおこした本願によって莊嚴された淨土である。この本願をおこした仏の心とは慈悲である。この慈悲の発露として具体的にたてられたのが西方十万億土の彼方の極樂淨土であるから、それは月の世界が存在するというような靜的なものではなくて、われわれに常に働きかける動的なものである。従って仏の願心を味うことのできる者には必ず感じ得る世界として存在するのである。それは普通の知識であるとかないとかいうものではないから、善導大師は日中礼讃の第十八偈で、「西方極樂は思議すること難し」といい、イ

ンドの世親菩薩は『往生論』で、極樂淨土の相は三界を勝過したもので虚空のように广大で辺際がないとのべたのである。さてもう一つの説き方であるが善導大師はこの淨土の本質というものについて次のようにのべている。「極樂は無為涅槃界なり」(法事讃)とか「西方は寂靜にして、無為の樂なり。畢竟逍遙ひつきようしやうようにして有無を離れたり。」(觀經疏)というのは、淨土は時間的にも空間的にも固定したものではなくて涅槃寂靜の世界であり真如法性の世界であり真如そのものであるということであろう。しかし考えてみると、淨土を涅槃界といい無為の境といい真如そのものといったところで煩惱に迷い生老病死に苦しみわれわれにとっては何の救いにもならないのである。しかも真如法性そのものも具体的に説かなければ人間の救済もできず、阿彌陀仏の大悲仏心もあらわれなから、無方に方をたて無相に相をあらわしたのが指方立相の淨土であり七宝莊嚴の極樂淨土なのであると説かれた。従って極樂淨土があるとかないとかだけを問題にするならば、淨土教の淨土は死んでしまうのである。その淨土が信仰として生々とはたらくのは、淨土や淨土の仏にまごころをもって対した時である。それゆえ善導大師は『往生礼讃』の偈文のはじめに必ず南無至心、歸命礼、西方阿彌陀仏と書かれたのである。

ふる里紀行

第一回

「北海道編」

駅長さんの話

武藤 善友

(函館市称名寺住職)

K駅は函館駅につぐ道南の大きな駅であります、その駅長さんの直話であります。

ある相者の言葉として「この駅に事故の多いのは袈裟掛けに胴体を轢断されたものがあり、その執念のため」であると一人の部下から報告をうけました。早速職員の殉職者名簿を調べて見ましたが、胴体を轢断されたものその他多くの事故死したものはあるが、相者の言葉に該当するものは見当たらないのです。しかし念には念を入れよとありますので、臨時雇いの帳簿を見てゆくうちに該当するものが見つかったので、それは昭和二十年八月十三日の夜、駅の構内で作業中かなりの距離を列車にひきづられたらしく、手足はばらばらにな

り、胴体は袈裟をかけたように轢断され、顔も見るかげもない形になっていたことが記されておりました。しかもそれは母一人子一人の十五歳の少年であり、今ならば中学生というところでしょう。右のような状態ですから、当時を知っている人の話では、引き取りに來た母親にはその顔も見せずに柩に入れて茶毘に附したというのであります。何分にも事故は終戦の日の三日前のことですから混乱の最中で、有耶無耶のうちにもそのようなことも行なわれたことと思われまゝ。現在は他の殉職者達の遺族はそれぞれ立派に生計をたてて居りますが、この少年の遺族一人だけは元の住所には居らず、近所の人々にも分らず行方が知れません。そこで相者の言葉に従って小さな舟を造らせ、人形を乗せてねんごろに弔い、今年の七月十六日、洞爺丸遭難碑の後の海に流したのでした。当日は生憎に風が沖の方向から吹きまして、お花も供物も人形を乗せた小舟も浜辺の方に吹き寄せられていました、その

時不思議に人形が生きているもののようにひとりで海中に飛び込んで見えなくなっていました。

それから一箇月余り過ぎましたが不思議というのでしょうか、有難いことに未だ一度も事故は起って居りません。

そして駅長さんは、このようなことはあるものでしょうかと問うのでした。私は一つの他の例を話し、他人が迷信だ何んだと言っても、今のお話は貴方自身が実際に見られた事実であるし、法然上人に

なき人のために、念仏を廻向し候へば、阿弥陀仏、光をはなちて、地獄、餓鬼、畜生を、てらしたまひ候へば、この三悪道に、しづみて、苦をうくるもの、その苦しみ、やすまりて、命終りて後、解脱すべきにて候と御法語の中にあることを答えたのでした。

わがふる里

桑 原 千 代 述

(札幌市真駒内在住・八十八歳)

日本の長い歴史から見ると、花見のようにほんの短い時をバツと栄え、そして衰えた北海道の西海岸の鯉の町寿都が私の故郷です。

千石場所と云われた日本海岸の漁場、磯谷歌棄寿都島牧を四郡と云いましたが、その一番栄えた時期を私は子供の頃から見たわけです。今の北海道全体の鯉の漁獲量は其の頃の一場所一夜の水揚げに相当する位ではないでしょうか。その頃漁不漁はありましても皆春になると鯉は来るものと疑わなかったものでした。毎年春に先がけ各網元は、東北、北陸方面へ前金で漁夫をやといに行きます。

その人達が三月に入るとござで巻いた荷物など背負い、船頭さん級の人は親方へ干柿やごまが沢山入った南部せんべいなどお土産に三々五々やって参りますと、漁の準備にかかります。やり出し(海へ突き出した棧橋のようなもの)を造り生鯉を入れる倉庫漁網の点検、鯉数の子の干場、船の手入れ、準備完了というところで網下しと呼ぶ宴会をします。

漁夫達はそれぞれのお国の唄など唄って楽しめます。宴が終り近くなると、船を漕ぎ出すところから始り、沖揚げ木遣り音頭、ソーラン節など作業の唄が次々唄われますが、ソーラン節はわ(梓)く船に網から鯉を大きなたもで汲み上げる時の歌でたも返し唄と云ったものです。沖揚げ音頭は鯉が大きいのにのった時漁夫達が渾身の力をこめて網を引き上げる時丈け唄う唄ですから漁の少ない時は唄うことがないわけです。

から、網下しにはその年の大漁の願をこめて皆切々と歌ったものでした。聞く者もその哀調に悲壮な切なさを感じ聞き入りました。網下しもすみ、鯨の来るのを今か今かと待っている、青い海が白っぽくなって来ます。鯨の群来ぐんきです。海には無数の鷗こぶが鳴き交わし海も陸もふるい立つのです。

定置の網に追い込んだ鯨を船に揚げその船をやり出しに横づけにし、もっここという背負い箱を背負った人々の行列によって、倉庫に運び込まれるまでは安心出来ません。何しろ生きものの海が相手ですから何時、時化しけが来るかわかりません。学校も鯨休みになります。小学生など棒の先に釘をつけ浜の落鯨を拾っても直ぐ手かご一杯位になりました。

手間取といいましたが、鯨製造の人達、行商仲買等四、五月の町の人口は何倍にもふくれ上りました。鯨漁も一段落し身欠数みかきの子魚肥等干し上り、倉庫にぎっしり積み込まれる頃、大阪北陸方面から弁財船や帆前船が種々の品物を積んで港に入って来ます。取引です。

京都も大事な取引先でした。網元の家などは一年分の必要品を一度に買い込んで蔵に入れておくのです。町の商店も五月が大晦日のようなもので漁場は一年中に買ったものの代金を、五月に支払いするのです。

漁は何時の時代も一種の賭で、あの頃でも隣の網が大漁しても吾が家の網を鯨が素通りしてしまふこともあり、又大のりにのって喜んで、のり過ぎて網が破れて鯨が流れ出してしまうこともあり、時化しけで定置の網を失うこともあり時化のため漁夫の命をも失うことさえあります。期間中は一時も気の安まる時がありません。

したがって皆信心の心が篤うございました。初漁の鯨は先づ神社へ上げましたし仏事は大層盛大に行いました。神様、それから、お坊様専用の家具什器を別に輪島へ注文し定紋入りで造りました。仏壇なども二百台、二百五十台などの立派なものがお金でも買いましたが鯨百石とか百五十石とかと交換されたりもしました。さる大名家の屏風とか、家老の家の仏壇など金銀珊瑚の細工の立派なものでした。その他由緒ある立派な品々が網元の家にはずい分ありました。第一次大戦の頃からあれ程とれた鯨が次第に北へ移り年々漁は減り網元も倒産する家が次々に殖え、鯨が生命の町でしたから目に見えて衰微し、人口も減って行きました。大正八年に敷かれた鉄道も赤字つづきで今は廃線になりましたとか。

私も故郷を出てもう三十年になります。今は代が替り若い人達が故郷を新しい姿に造りかえていることと思います。



~~~~~  
和 来 ば な し  
~~~~~

乗りつけぬ蓮台

馬方の八五郎は、家業に似合わない後生願いであつた。お念仏の功德によつて往生をしてそのまま仏さまになった。

さて、どうも乗りつけぬ蓮のうてな。痛い足をこらえて坐っているか、どうかすると、蓮台がゆらゆら動きだした。すると途端に八五郎は、横の方を一つたいて、ハイドウドウ。

幽霊が命を失う

あるとき西寺町の墓地より幽霊がでるといふ噂さが広まつて人が通らなくなった。一人の男が

「そんなら、私が幽霊の出ないようにしてやろう」

といつて、一杯ひっかけた墓場に行き、大塔のかげにかくれて待つていた。

やがて、夜半頃、ヒュードロドロと幽霊がでてきて、南の方へ行つた。そのとき、男はたもとより粘土を出し幽霊の出た穴を埋め、ふみかためて、又そつとかくれていた。

しばらくして、幽霊がもどつてきて、もとの穴へ入ろうとおもひ、ヒュードロドロと消えようとおもつたが消えられず、またヒュードロドロといつても、いつても消えられず、幽霊はとんと力をおとし

「ああ、もはや、おれの命もこれきりじゃ」

来世は出家に

出家が狩人に出会い、

「お前は物の命を取つてくらしているとは悪い了簡じゃ。

この世でそのように獣ものを殺せば、来世でその通り殺した獣ものとなり、身を苦しめられる。悪いことはすすめないから、殺生をやめよ」。

と云つた。すると狩人は

「そんなら、この世で狐を殺せば、あの世で狐になりますか」

と問うと、出家は、

「いかにもその通り、狐に生まれる」

と云うと狩人は涙をながして怖しがり、やがて鉄砲に火薬をつめて、出家めがけて進みよった。

出家は顔色をかえ、

「これ何をするか、迷惑千万じゃ」

と云えば

「いや貴僧のご意見にしたがい、来世のために、貴僧を殺して、出家に生れかわります」。

嘘くらべ

甲「一つ嘘くらべをするべえ。お互に腹いっぱい嘘のつきっこをするんだ。そいつあ嘘だろうといった方が負けだ、いいかね。賭けは十両」。

乙「よからう。ところで、昨夜おれの家の前で、とてもえれえ事件がおきたが、お前知っているかい」

甲「うんにゃ」

乙「おれたちの井戸の水は村一番だっていうことはお前も知っての通りだ。その井戸を昨夜盗みにきた奴がいるんだ。いい塩梅におれが、そいつを見つけたんだ。いきなり泥棒ととなりつけたら、野郎驚きやがって、片脇にかか

えていた井戸をその場へおっぼり出しゃがった。お蔭で折角の井戸も滅茶々々よ。三つにへしち折れまったよ」

甲「おい、冗談いうなよ。なんぼなんでも、お前」

乙「おいでなすった。そこで約束の十両はお辞儀なしにいただくよ」。

甲「畜生うまくせしめやがったな。だがその金は、明日まで待ってくれよ。明日おれが、お前のところへ届けるよ」その翌日待っていても甲はなかなかやって来ない。業を煮やして催促に出かけた。

乙「約束のものを貰いにきたよ」

甲「おお、いいところへ来てくれた。実は昨日あれから帰ると、家じゃ嬬め、急に虫がかぶったってえんで大騒ぎよ。それから夜中になっていいいよ産みにかかったが、子供は一人じゃねえ」。

乙「そいつはお目出度え、双児かね」

甲「双児や三つ児どころか、今朝までに出てきたのが、都合十七人さ。しかもまだ産み切っていねえ始末だ」

乙「おいおい馬鹿にするな。そんなお前、べら棒な話があるか」。

甲「しめた、じゃお前、昨日の賭けは、とんとんにするぜ」

=角川選書=

梶村昇著

『法然』



ニオン神学校に留学、帰国後、亜細亜大学に奉職、現在同校教授として活躍中である。そして日本仏教思想史、アジアの宗教などを中心とした。そのバイタリティあふれる研鑽生活は愈々みがきかけられるところであるが、そんな中から生まれたのがこの書物である。

従来からいわれてきたことであるが、各宗々祖の研究書を著述するにあたっては、その主観性（宗祖としての位置づけから神格化されて見られる面）客観性（史実に忠実に人間として見る面）、両極端の接点が問題とされている。ことに法然上人の伝記は近世以前の

人では、聖徳太子と並ぶ多種のものが残っており、その内容も一致していない。こうした中から、法然上人そのものを浮きぼりにすることは仲々困難といわねばならない。このことが原因というわけではないが、法然上人が貴族中心の仏教から一般庶民への仏教へ転換せしめた、所謂鎌倉仏教の先駆者であるにもかかわらず、同時代の各宗々祖に比して研究書がはるかに少ないことも事実である。

梶村氏はこうした点もふまえて、本書では日本仏教の流れの中の、一念仏修行者としての法然上人をとらえている。したがってただ単に上人の事蹟をその経過にそって並べるだけにとどまらず、それぞれの関連箇所でき得る限り当時の仏教活動の範囲をも述べている。その意味から、たまたま脇道とも思えるところまで言及している部分もありはするが、それがまた本書の特色であり、日本仏教史のミニ版ともいえるところである。

ここで、七章段から成っている本書の概要

「長い間一度訪ねたいと思っていた法然上人の誕生地に、機会を得て行くことができた。岡山駅から津山線に乗り換えて、県境の中国山地から流れてくる旭川を右に見たり、左に見たり、山峡を奥へ奥へあえぎながら登っていくと、……」

紀行雑誌を見ているような感じで、何ら抵抗なく本論に入っていける、この書き出しにはじまる本が、ここに紹介する角川選書『法然』である。

まず、著書梶村昇氏を紹介しよう。梶村氏は大正一四年、京都府に生まれ、昭和二五年大正大学を卒業、昭和三二年ニューヨークユ

を見ることにする。この七章段は内容から分けるに四つに分類することができ。

第一章 末法の世に生まれて

第二章 出家と遁世

この二章段は、上人出家から天台教学修行までの間で、父時国の死、出家にいたる経緯、当時の仏教の中心叡山教学の貴族化、この頃から空也、源信などによって芽ばえつつあった念仏行の紹介、上人が天台に学びその教学に没頭し、やがて悩みをもつまでの経緯などについて言及している。この章段では特に当時に至るまでの庶民の宗教生活について触れている点を注目したい。

第三章 浄土開宗

第四章 念仏の声をひそめて

第五章 専修念仏の人びと

この三章段は、上人が叡山・南都などの既成仏教側の圧力の中から浄土宗を開くに至り、その教えが宮中貴族から名もなき人びとに至るまでひろまっていた間の事蹟を克明に記している。ことに上人が従来の聖道門を捨し、浄土門を選択した、この求道の態度について法然の回心は、法然個人にとって、浄

土教にとって、日本仏教にとってきわめて重要な意義をもつという長期的な、しかも、仏教思想史における画期的な事柄である。法然上人の専修念仏帰入は、日本精神史という長期的な、しかも、仏教思想史をも含めた広い範疇において考えられなければならないことである。(中略)法然の求道の態度というものは、一口に言えば「速かに生死を離れん」ということであつた。」と述べ、上人が日本思想史上、一大方向転換を成し遂げた経緯についての言及には、鋭いタッチでペンを進めている。

第六章 法難と示寂

この章段では、旧仏教側の反駁による法難、そして配流、念仏の声する所わが遺跡とされた、上人晩年の破乱に富んだ一ページを記している。

第七章 信仰を今に伝えて

この章段は本書の一大特色ともいえるところである。上人の生涯をただ紹介するにとどまらず、その人生的、文化史的な価値観がどこにあったか、愚痴の法然とまで申された上人の体験、つまり宗教が知識理論ではなく体

験によってつちかわれるものであるという点について論究を進め、それらをいかに今日に生かし得るかについて言及している。推論ではあるが、この章段こそ梶村氏の目指した結論ではなからうか。

この外本書には付録に、法然の著作と諸伝記として、上人に関する関係資料および年譜が載せられている。この略歴を知る上で便利である。

以上、この概要をみたのであるが、充分な紹介文とはなりえないかも知れない。ただ最後に研究書という立て前からすれば当り前であるけれども、本書がこれまでの法然上人研究の出版物に比して、梶村氏の立場によるところであろうが、比較的客観性を帯びた角度から見られているということである、ということをつけ加えさせていたきたい。

しかし、これとて一読者の見解にすぎない。実際に手にとって一読していただきたい本である。初心者の方々には良き道しるべとして、すでに道を歩まれている方々には整理・反省としての休憩所となり得ると思う。

(角川書店発行・価五二〇円)

勝尾寺への道

和 良 橋 高



バスのなかで質問をうけたときに答えるのに困った。というのは、勝尾寺に参詣のときに、「かつお寺」なのか、「かつお寺」なのか、どちらが正しい寺の読み方なのかということである。ふと困ったが、それは先方に着くまでおあずけにしておいたが、この寺の重文二階堂というお堂で、この寺の小野貫主が、「かつお寺」と発音したので、やっと疑問に答えることができた。

勝尾寺というのは、大阪府箕面市粟生にある高野山真言宗の名刹である。昔なら山深いところで、参詣するのにも、表の参道からだとかなり勾配のきつい坂道である。然し今は府道がちゃんとできているので、そのうちに全部の舗装ができる日も近いと思われるから、京都から大阪へ行く名神高速道路の茨木から、北西へ行けばこの寺の門前まで行ける。

この寺に法然上人が逗留したのは四国の流罪が許されたときである。

四国から許されてかえったとはいえ、京畿に入ることができないのであるから、摂津の勝尾寺に滞在するのである。四十八巻伝に、

恩免ありといえども、なお路中の往還ゆるされざりしかば、摂津国勝尾寺にしばらくすみたまふとある。であるから、しばらく謹慎の意味であったと思う。どうして勝尾寺がこの場所になったのか、これは想像するより仕方がない。おそらくこの寺には、すでに浄土往生についてすばらしい行状を示した、勝如という僧のいたことが、法然上人をして、ここに足をむけさせたのではないかと想像される。

勝如は教信という沙弥が念仏をとなえて、見事な往生をとげたことを眼のあたり見て、自分も口称の念仏をとなえて、浄土往生をねがったことが伝えられているから、法然上人もこの寺への道を選んだと考えると、なおさら法然上人の遺徳が追慕される。

四国からこの勝尾寺にくるまでの間に、瀬戸内海で、上人の船が難波して和歌山に打ちあげられ、



その地で教化したあと、この勝尾寺につくことになっているが、その道順は全く不明である。

然しこの山深い勝尾寺へは、参詣道をくるより仕方がないから、七十五歳の法然上人にはかなり険しい道であったと思われる。そして勝尾寺では、本堂のうしろ百五十米ほどのぼった二階堂を住み家として、四年間をすごすのである。二階堂の意味も、なぜそのような呼ぶのかわからない。

然しじっとみていると、たしかに高くなっている二階造りのような感じである。二階堂は、まだ新しい建物で、明治に大阪一心寺の真阿上人が建立したとつたえられている。古さ、新らしさよりも、晩年の法然上人が居住したところとしては、四年間であるから、比叡のうち五年に比らべては問題にならないが、とも角もかなり長い間であったから、そう思うと、この二階堂には、晩年の上人の念仏の心が溶け込んでいると思った。

二階堂の向拝の下に立って、向うの山をみると、細い参道が眼につく。かなりきつい坂道であるし、一人で通れるくらいの細い道である。七十五歳の法然上人が、この道を通ったかと思うと、草むらを両方に分けたようなこの参道が、なおさらくつきりと眼に浮んでくる。

この二階堂の本尊がまた珍らしい。

戸板の御影というので、本尊さまを安置する宮殿のなかには、二枚の杉戸がまつられている。善導・法然両祖であるということであるが、その板戸には何も画かれていない。ただの二枚の戸である。寺伝によると、両祖の御影がこの板戸に写ったということから、その写った杉戸を本尊にしたということである。念仏の申しようの足りないものには、ただの杉戸であるかもしれぬ。然し念仏をよるこぶ人にとって、えもいわれぬすばらしい御本尊である。両祖を本尊にするなどは、この寺だけであろう。この寺と法然上人の深いつながりを知る一つのいわれでもある。

Ⅱ 宝物シリーズⅡ

これは、都下小金井の幡随院開山堂に安置されている、幡随意上人の木像である。幡随意上人は、正しくは智譽白道と号され、江戸時代の初期に、京都知恩院満譽尊照や江戸増上寺観智国師存応などと並んで活躍した浄土宗の高僧である。

上人は関宿大竜寺・館林善導寺など、数多くの関東寺院を歴任された後、慶長七年（一六〇二）頃に、当時の浄土宗京都四本山の一つである百万遍知恩寺の三十三世に入られている。このころの知恩寺は知恩院に対抗するような勢力をもっており、関東から入った僧は数少ない。おそらくこれは上人の名声と学識の高さによるものである。このことは現在数多く残っている、上人自筆の典籍や法論の座次などからも裏付けられる。

上人の百万遍知恩寺時代の活躍は明確ではないが、その後まもなく江戸に新寺建立を志されたようである。慶長十三年頃には、広く大衆に浄財を勧進している。その

結果、上人の力によって、あらたに江戸神田に建立された寺が神田山幡随院新知恩寺である。『幡随意上人伝』などは江戸に新知恩寺を建立することができたのは、徳川家康のバックアップによるものであるとしている。

しかし、上人が江戸に新寺建立をめざされたのは権力者の保護や中央進出を意図されたものではなく、荒れた江戸庶民の心情を救われんとされたものである。このことは上人が晩年の手紙の中で、

やっと江戸に一寺を建立し、静かに念仏生活を送ろうとしていたところ、徳川家康の命令で、有馬のキリシタンを仏教徒に改宗させるために、北九州に出向くようにといわれた。そのため折角の念仏三昧の生活が中絶し、まことに残念である。

となげかれていることから裏付けられる。

当時の高僧達がややもすれば幕府との交渉にあけくれ、名利に執着したのに対し、上人は一人超然として世俗的権威を否定され、あらゆる階級の人々と一緒に念仏生活を送られた名僧である。また、江戸時代を通じて幡随院開山として、広く江戸庶民に親しまれている。

（宇高良哲）



—— 人像上意隨幡 ——

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十五年九月二十五日印刷
昭和四十五年十月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

”御年始のご挨拶がわりにご用を“

『修養ひめくり』

- ・日々の生活に潤いを与える名文の数々
- ・一部100円(会員のかたは90円) 送料実費
- ・用紙33枚タテ37cmヨコ13cm
- ・見本お申しこみは150円お送り下さい

『浄土宝暦』

- ・浄土宗の教え・行事などを加え内容更に充実した信徒向け必携のこよみ
- ・一部25円(50部以上より単価22円) 送料実費
- ・B6版 40頁

お早目にお申込み下さい

東京都千代田区飯田橋1-1-16

発行所 法然上人鑽仰会

電話(03) 262-5944番